

## 助詞<に>の二方向性

加藤弘

東北大学留学生センター

katoh@intcul.tohoku.ac.jp

### 1. はじめに

日本語の格助詞<に>を含む語句(以下、「<に>句」と略す。「<が>句、<を>句」も同様の省略。)は、文の中でいわゆるgoalを表わしたり、いわゆるsourceを表わしたりするという、いわば矛盾した「二方向性」をもっている。たとえば、

- 1) a. 母に小遣いをもらいました。
- b. 母に小遣いをあげました。

本発表は、この「二方向性」を文の「他動性」と文の諸特徴で説明しようとするものである(以下では、「方向性」のかわりに「指向性」という用語を用いる)。

まず、助詞<に>と<で>の比較は本稿の目的ではないが、その違いはよく問題にされるので、次の違いだけを確認しておく。

<に>は述語と深く関わり、モノの位置を表わし、<で>は述語とは直接に関わらず、デキゴトの位置を表わす(神尾1980、中右1995)。そこで<に>句は、それ自体と、<が>句で示される事項との間の関係を示すものと、発表者は考える。

また<を>句は、因果空間にあって、<が>句で表わされる領域と<に>句で表わされる領域の中間にあるものと見られる(加藤弘・佐藤滋1995a)。

なお、スタイル上の理由から例文中で<が>句のかわりに<は>句を用いたところがあるが、<が>と<は>の違いは本稿の結論に影響を与えないものである。

### 2. <が>句<に>句の名詞の性質

まず<に>句の指向性には、<が>句、<に>句に現われる名詞の性質が関わりと考えられる。<が>句、<に>句に現われる名詞に次の4つの類を立てる。

- 2) a. <動物>: 人・犬など、いわゆる[+animate]の素性をそなえた存在。思考・感情を持つものを含む。

- b. <動因性の名詞>(略して<動因>): 動作・作用を起こしうる存在。「人間、動物、コンピューター」など。「日光、放射能、熱」などの物理現象。「台風、風、雨、波、寒さ」などの自然現象。「火災、怪我、事故」などの出来事。
- c. <場所>: 広い意味で場所とみなしうる物。
- d. <物>: 上記以外の物一般。

この4つの類によって、次のような原型的な指向性が設定できる。

- 3) a. <動物ガ 動物/物ニ>なら、  
指向性は <動物ガ → 動物/物ニ>
- b. <動物ガ 場所ニ>なら、  
指向性は <動物ガ → 場所ニ>
- c. <動物/物ガ 動因ニ>なら、  
指向性は <動物/物ガ ← 動因ニ>
- d. <動因ガ 動物/物ニ>なら、  
指向性は <動因ガ → 動物/物ニ>

つまり、<動因>はつねに指向性のsourceとして働く。<動物>は、<が>句にあっては、指向性のsourceとして働く。<動物>は、<動因>をかねていて、ある条件のもとで<動因>として働くと考えられる。たとえば、4)は同じ<動物ガ>を含んでいるが、指向性は異なる。

- 4) a. 医者がインフルエンザにこの薬を使った。  
(医者 → インフルエンザ)
- b. 医者がインフルエンザにかかった。  
(医者 ← インフルエンザ)

「医者が」は4) aでは他動詞文の主格であるために<動因>として機能している。4) bでは指向性のgoalとして機能している。<に>句に<動因>があるためである。

### 3. 文の他動性

Hopper & Thomson (1980) (以下では「H&T」と略す)によれば、「transitivity 他動性」とは行動が動作主から被動者へもたらされる、または、受け

渡される (transferred) ことを表す文が文全体として持っている性質と考えられてきたという (p.251)。H&Tは、この「他動性」の要素となるようなパラメーターを10項目、提案している(表1)。

表1は、次のように読む。ある文が各パラメーターにおいて左側の値をとれば、その分だけその文は他動性が高い。10のパラメーターのうち、最後の2つは「目的語 'Object'」の「被動性」に関するものである。その1つ、最後のパラメーターは目的語の「個体度」に関するもので、これはさらに表2に詳細なパラメーターが示してある。目的語の個体度が低いほど被動性は高い。

表1 Parameters of Transitivity (1)  
(Hopper & Thompson(1980) p.252)

		HIGH	LOW
A	PARTICIPANT (参加者)	2 or more participants A and O	1 participant
B	KINESIS (動性)	action	non-action
C	ASPECTS (終端特性)	telic	atelic
D	PUNCTUALITY (瞬間性)	punctual	non-punctual
E	VOLITIONALITY (意志性)	volitional	non-volitional
F	AFFIRMATION (肯・否)	affirmative	negative
G	MODE (現実度)	realis	irrealis
H	AGENCY (動作主度)	A high in potency	A low in potency
I	AFFECTEDNESS OF O (被動性)	O totally affected	O not affected
J	INDIVIDUATION OF O (個体度)	O highly individuated	O non-individuated

(A, Oは、それぞれ'Agent','Object'をさす)

表2 Parameters of Transitivity (2)

INDIVIDUATED	NON-INDIVIDUATED
proper	common
human, animate	inanimate
concrete	abstract
singular	plural
count	mass
referential, definite	non-referential

H&Tの主張を逆に見れば、他動性が強いほど、この「受け渡し」の強さ (intensity of transference) (以下では「移動特性」と呼ぶ) が強いということになる。日本語の<に>句を含む文においては、この「受け渡し」が<が>句と<に>句の間において起こる。

他動性が強いほど<が>句から<に>句への指向性が明確に示されるが、他動性が弱まると、この指

向性は不明確になる。一方で、<が>句や<に>句に<動因>があると、その句からもう一方へ向かう指向性が示される。この「受け渡し」がどちらの方向へ向かうのかは、この2つの要因のせめぎ合いの結果と言える。そして、そのすべてを決めるのは、文全体の諸特徴である。

母が娘に小遣いをやる  
兄が弟に数学を教える  
母が娘に掃除をさせる  
犬が人にかみつく  
車が人にぶつかる  
委員が委員会に出る  
登山家がヒマラヤに登る  
酔っ払いがベンチに寝転ぶ  
AチームがBチームに勝つ  
係長が書類にミスを見つける  
彼は医者之家に生まれた  
彼は医者になった  
彼は医者之长男に生まれた  
母は台所にいる  
部屋に誰かがいる  
酔っ払いがベンチに寝転んでいる  
テーブルの上に花瓶がある

湖水に風が吹いている  
青年が困難に耐える  
社会が貧困にあえぐ  
中学生が宿題にうんざりする  
AチームがBチームに負ける  
顔が日に焼ける  
人が車にぶつかる  
犯人が警察に捕まる  
1組の生徒たちが山田先生に習う  
弟が兄にバレーボールを教わる  
孫がおばあちゃんに小遣いをもらう  
郵便屋さんが犬にかみつかる  
兄が弟に自転車を壊される

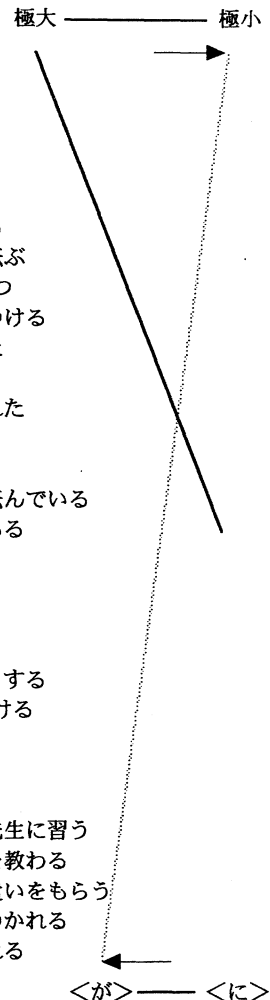


図1 他動性の強度と<に>句の指向性

—— : 他動性の強度  
----- : <に>句の指向性

図1は、他動性の強さにしたがって、<に>句を含む文を配列したものである。図の上から下へ向かって移動特性が弱くなる。それにとってもなつて<が>句から<に>句へ向かう指向性も弱くなる。中央で他動性は極小になり、<に>句は、<が>句の名詞の移動する先というよりは、その所在する位置を

示す。そして、図1の「青年が困難に耐える」からさらに下へ下がると、今度は逆に<に>句から<が>句へ向かう指向性が現われる。ここでは、H&Tが言う意味における他動性がなくなり、<に>句に<動因>が現われるためである。たとえば、5)では「日」が<動因>であるため「<に>句 → <が>句」の指向性が示されている。

5) 顔が日に焼ける。

#### 4. 人間の認識の一特質

<に>句の指向性にかかわるもう1つの要因は、人間の認識の特質である。人間の認識・判断は、ある「より所」を基準に行われることが多い。たとえば「このリングは大きい。」と判断したとすると、そこでは、経験的に得られた<平均的なリングの大きさ>という基準との比較がなされている。同様に人間が自分自身やそのまわりに存在する物体の移動する様子を観察する際にも、<何がどちらへ向かって動いているのか>に関する判断は、何かの観測基準点に頼っている。そして、固定した基準点が得られる場合は正常な判断ができるが、そうでない場合は、判断がゆれることになる。

たとえば、東京の山の手線と京浜東北線は一部の区間で並行している。そこで、この区間で電車が並んで走っている時、これらのうちの一方の電車に乗っている乗客にはもう一方の線を走る電車が前進したり後退したりするように見える。さらには両線の線路の間隔の変化につれて、相手の電車がこちらへ近づいたり遠ざかったりするように感じる。この際、相手の電車を基準として意識してみると、今度は、こちらが前進したり後退したり、相手の電車に近づいたり遠ざかったりするように感じるができる。

言語表現においては、特に表現内容が抽象的である場合、移動の基準点が明確でないことがある。そこで、<が>句と<に>句のうちのどちらからどちらへ向かって「受け渡し、移動」が行われているのか、について判断が揺れることになる。たとえば、6)では、指向性をどちらとも決めがたい。

6) 私の乗っていたバスが事故に遭った。

「事故に遭う」という現象は、物の受け渡しとしてやや抽象的なため、<が>句と<に>句のうちのどちらからどちらへ受け渡しが行われたのか決めがたい。そのため指向性は相対的にならざるを得ない。たとえば、バスが被害者側である場合、「事故をもらう」という言い方があるところから、「バス ← 事故」という指向性を認定してもよいように見え

る。だが日本語話者の間では「バス → 事故」という感じをもつ人も少なくないだろう。

#### 5. 文の意味と<に>句の指向性

図1の例文を見ながら、<に>句の指向性が決まるプロセスを考える。

- 7) a. 母が娘に小遣いをやる。
- b. 母が娘に掃除をさせる。
- c. 犬が人にかみつく。

7)のいずれにおいても、3)aの原型に基づいて「<が>句 → <に>句」の指向性が見られる。

- 8) a. 人が車にぶつかる。
- b. 車が人にぶつかる。

8) aでは「人」も「車」も<動因>であるから、両方向の指向性が可能である。ふつう人が故意に車にぶつかることはあまりないので、「車」の方を<動因>とする読みが優先されて、「人 ← 車」の指向性が感じ取られる(原型の3)cによる)。しかし、この「人」が「当たり屋」であれば、「人 → 車」という指向性になる(原型の3)aによる)。

いっぽう、8) bでは<車 → 人>の指向性のみが可能である。これは、車と人の接触では、車が被害の<動因>になるのが普通だからである。「人に」は<動因>として機能しない。

- 9) a. 彼は医者之家に生まれた。
- b. 彼は医者になった。
- c. 彼は医者之の長男に生まれた。

9) aでは、「医者之家」が<場所>であるから3) bの原型に基づいて、<に>句へ向かう指向性が示されている。9) bでは、「医者」という語が「医者」という立場を暗示するので、逸脱しているが3) bの原型に基づく。また、「なった」は、過去形であるところから表1のG. 現実度の「realis 現実」という点と、意志的行為を表わし得るところからE. 意志性の点で、他動性をある程度持っている。そこで、<に>句へ向かう指向性が読み取れる。9) cでは、「医者之の長男」という語句が「そういう立場」という<場所>をかくかに暗示するために3) bの原型によって、わずかに<に>句へ向かう指向性を示す。

- 10) a. 母は台所にいる。
- b. 部屋に誰かがいる。
- c. 酔っ払いがベンチに寝転んでいる。
- d. テーブルの上に花瓶がある。

これらでは、文の他動性がほとんど無いために＜に＞句は移動先ではなくて、所在地を示している。それでもなお、10)の cよりはb、bよりはaの方が＜に＞句へ向かう指向性を感じさせる余地をもってゐる。それは、「母」が「誰か」より具体的であること、「いる」の方が「...ている」よりは意図的表現(たとえば「...てください」「...いよう」)になじみやすいことによる。いずれも、E. 意志性のパラメーターにおいて他動性を含意する特性である。

以下では、表1以外の例も取り上げる。

- 11) a. 係長が書類にハンコを押す。  
b. 係長が書類にミスを見つける。

11)aでは、原型の3)bに基づいて「ハンコ」が「書類」という＜場所＞へ移動するという意味構造が示される。「書類」は、ここでは＜場所＞として扱われている。

11)bでは、実際の移動は行われていないが、11)aと同様に「書類」が＜場所＞の読みを許すので、3)bの原型によった読みが可能ではある。しかし「見つける」がC. 終端特性とE. 意志性において他動性の弱さを示す値をとっているので、「書類に」は、移動先というよりは、むしろ所在場所に近い。

- 12) a. (医師団が) 胃の手術に3時間をかけた。  
b. 胃の手術に3時間かかった。

多くの日本語話者は、直観的に12)aの「手術に」をgoalとして、12)bのそれをsourceとして受け取るだろう。12)aは「かけた」が他動詞であるため、他動性を持ち、そこで＜に＞句へ向けた指向性が示される。12)bは、E. 意志性、H. 動作主度などのパラメーターにおいて他動性の弱さを示す値をとるところから、移動特性が低く、＜に＞句へ向かう指向性が現われない。いっぽう「胃の手術」が＜動因＞としての読みを可能にするために＜に＞句から発する指向性が感じられるのである。

- 13) a. ススキが風に揺れている。  
b. 政界が汚職事件に揺れた。

13)aの「揺れている」はC. 終端特性、D. 瞬間性、E. 意志性などで他動性の弱さを示す値を示している。いっぽう「風」が＜動因＞として機能しているので、13) aは、原型の3) cによってゐる。13) bでは、「政界」が人の集団つまり＜動物＞をさし、「汚職事件」が＜動因＞として機能しているので、3) cの原型に基づいて解釈できる。そこで、どちらも「＜が＞句 ← ＜に＞句」という指向性を示す。

- 14) a. 私は、風に当たりにベランダへ出た。  
b. 私は、日に当たって、顔が焼けた。  
c. 私は、フグの毒に当たった。

同じ「当たる」だが、14)aのそれは、E. 意志性、H. 動作主度のパラメーターによって意志性の動詞であるから、他動性がかなり認められる。

14) b、14) cでは逆に「当たる」に意志性がないいっぽうで、「日、フグの毒」が＜動因＞として読めるので、3)cの原型によって解釈できる。そこで、14)aでは「私 → 風」という指向性が、14)b、14)cでは「私 → 日/フグの毒」という指向性が説明される。

受動文では「＜が＞句 ← ＜に＞句」という指向性が見られる。これは受動文が表わす作用の出どころが＜に＞句で表示される動作主だからである。「母に教えられる → 母に教わる → 母にもらう」に見られるように、受動構文は意味的な受け身文を介して更に一般的な＜受け渡し＞の表現に連なるものである。つまり＜＜に＞句からの作用の受け取り＞である受け身文は、一般的な＜＜に＞句からの受け取り＞の表現の延長上に位置付けられる。そこで図1では、「習う、教わる、もらう」といった＜＜に＞句からの受け取り＞の表現の下に受動文を配置した。

## 6. 結論

以下の4つの要因によって＜に＞句の二方向性は説明できる。

- 15) a. ＜が＞句、＜に＞句の名詞の性質  
b. 文の他動性  
c. 人間の認識の特質  
d. 文の総合的な意味

## 参考文献

- Croft, w. (1991). Syntactic categories and grammatical relations. University of Chicago Press, Chicago.  
Hopper & Thompson (1980). "Transitivity in Grammar and Discourse." Language 56  
加藤弘・佐藤滋(1995a). "格助詞「が、で、を、に」の動的付与過程モデル." 言語処理学会第1回年次大会発表論文集, 373-376. 言語処理学会.  
加藤弘・佐藤滋(1995b). "受動化と使役化による格助詞の動的付与." 情報処理学会研究報告, 自然言語処理107-8. 神尾昭雄(1980). "「に」と「で」-日本語における空間的位置の表現-" 月刊言語, 9(9).  
中右実(1995). "「に」と「で」の棲み分け.-日英語の空間認識の型(1)-" 英語青年140(10), 520-522.  
山梨正明(1993). "格の複合スキーマモデル." 日本語の格をめぐって. 1993. くらしお出版.  
山梨正明(1994). "日常言語の認知格モデル." 月刊言語, 23(1-12).